第 14 回オンライン研修会「ろう重複児への教育を考える」講師　松﨑丈先生
＜質疑応答＞
１　聴覚支援学校の小学部で教員をしております。子どもたちの経験が少なく、言葉と実物と手話表現とがうまくつながらない、というお話にとても共感しました。学校生活や授業の中で、児童の「物」に対するイメージを増やし、言葉を増やしていくには、どういった工夫が考えられるか、教えていただきたいです。

➡小学部になると、どうしても「教室」という場でどうするかを考えてしまいがちです。ご一緒に授業リフレクションを重ねてきたあるろう学校では、ろう重複の子どもたちにとって、幼稚部だけで必要かつ十分な経験を重ねるには時間が足りなさすぎるし、単一ろうの子どもたちにあわせた小学部の教育環境にいきなり合わせてもらうのも難しいのではないかと考えていました。そこで、小学部低学年の時間割編成で、朝の HR から１，２時限の自立活動までを１つの活動として設定し（休憩のタイミングも個々の子どもに合わせる）、幼稚部と同じような活動の流れで玩具などろう重複の子どもたちが興味関心のある「物」を「教室」のなかに導入したのです。そうしたら幼稚部ではいつも一人だけで遊んでいたのが少しずつ他のろう重複の子どもと一緒に遊ぶようになり、言葉としての手話と物とのつながりだけでなく、その物をテーマにしたやりとりも生まれたのです。このように幼稚部と小学部の相互理解によって柔軟的な発想に基づいた教育環境が整備されたことで、言語、認知や社会性も育つような学習経験ができたと考えることができます。このようにろう重複の子どもたちのニーズも踏まえて幼稚部から小学部へ移行できるように支援する観点も大切なポイントかと思います。

２　補聴器や人工内耳を装着しているお子さんは、言葉の覚え始めの２~3 歳ころ、主となるコミュニケーション手段が音声なのか手話なのか、関わる大人も含め、定まりにくいように感じます。伝えたいことがたくさんあるのに伝える手段が曖昧になりがちだと感じています。そのようなお子さんとコミュニケーションを取るとき、どのようなことを意識したらよいでしょうか。

➡お子さんが２～３歳頃でろう重複であることを踏まえると、すぐには主な手段が手話なのか音声なのかを判断することは難しいように思います。補聴器や人工内耳を装用していてもどのような手段がいいのかを判断するために、お子さんとのコミュニケーションの流れで、お子さんは私たちの行動からどのような情報を取り込んでどのような行動（反応）をしているのかを観察することから始めることになるかと思います。その中で、私たちが使う手話や音声がわかるかどうかではなく、そのお子さんがわかる情報（表情、仕草、身振り、写真、絵、手話や音声など）とは何かを探ってみます。例えば、手話や音声より表情、仕草

や身振り（物を使って見せるのも含む）の方が反応がいいのであれば、もしかしたらいずれは手話を身につけていく方向に向かうかもしれないと仮定しておきながら（実際はすぐには決められないことが多いです)、表情、仕草や身振りでどれほどコミュニケーションを深められるか関わってみることになります。その中で手話や音声も時々使って反応の変化を確かめてみるのも良いです。そのように意識してコミュニケーションをとってみることになると思います。

３　対象児をよく観察して特徴をつかみ、個別に調整すると教えていただきました。調整の考え方や工夫された事例について教えてください。

➡これについてここで的確に説明することは非常に難しいのですが、簡潔に述べます。まず「よく観察する」ことや「調整する」ことはどういうことかについて理論的な土台を作っておくことが必要になります。例えば、「よく観察すること」で言えば、子どもだけを見るのではない、子どもの行動は外界との相互作用によって発現するという考えがあるのだから、子どもと他者や外界との相互作用を見ながら子どもの行動の意味を捉えていくのが重要になる、と様々な学問の知見を参考にして「観察論」を作ることになります。行動や調整、必要な係わり（指導も含む）の考案などもそのようにして理論的土台を作り、実際に実践しながら、ああこうして観察すればいいな、このようにすれば必要な係わり（指導）も見いだせるな、と理論と実践のつながりをよりかためてきました。調整の考え方や工夫した事例については、以下の論文をご覧いただけると嬉しいです。なるべく親御さんや学校の先生方にも読んで頂けるように執筆したつもりです。
松﨑丈（2018）ろう重複障害児との手話を主とするコミュニケーションの形成を目指した実践研究. 宮城教育大学紀要, 52, 241-257. 以下の URL から本全文ダウロード可能（無料）。
https://mue.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=687&item_no=1&page_id=13&block_id=66

４　幼稚部に勤務しています。幼児と楽しそうにコミュニケーションをとっている先生を見て、私もそのようにできるといいと思いながら、なかなかできません。特に重複の幼児で、幼児からの発信が分かりづらい幼児とは、うまく遊んだり関わったりすることができません。どのようにしたら、幼児と向き合って遊んだり学習したりできるでしょうか。

➡全国各地の聴覚支援学校を回って授業リフレクションをしているのですが、幼稚部だけでなく小学部、中学部、高等部でもそのように子どもからの発信がわかりにくくどうしたらいいか悩んでおられる先生方は多いです。どうしてわかりにくい障害状況が起こるのか、担

任の先生とご一緒にビデオ分析をしてみますと、先生方は以下の２点に直面しやすいことがわかりました。
第一に、子どもの行動だけを見ていて、自分の係わり（行動）との相互作用は見ていなかったこと。そのために突発的に行動が出たように見えたり、どうしてそのような行動をしたのか意図がつかめなかったりしています。自分の行動も観察対象に含めて、相互作用の流れを見ていくことが大事です。
第二に、子どもの行動を、こちらに意図的に伝えていると思われる発信だけに限定してしまっています。実際は、意図的に伝えてはいない子どもの行動の方が、その発信の意味や背景をようやく見出せる手がかりが多いです。その行動とは非言語行動のことかと思うでしょうが、それは少し違います。非言語行動であっても、そこには意図的に伝えるもの（例えば、ジェスチャー）と意図的に伝えていないものの両方が含まれているからです。意図的に伝えていない行動も、子どもが外界との相互作用のために調整していることの表れであると考えれば、注意深く観察することが大事になるでしょう。

５　教員をしています。教えている中で、衝動性が強い、ワーキングメモリーが乏しい、手先が不器用等、発達の特性があるお子さんたちがいます。そのようなお子さんたちにも、先程のお話にあったような特性について勉強をし分析をしていくという方法が、支援に繋がっていくのでしょうか。先生のお考えを教えていただけると嬉しいです。

➡私はそのように考えています。なぜなら「衝動性が強い」などは、お子さんの行動のみを大まかに捉えてカテゴリー化したものなので、それだけではお子さん一人ひとりがどのように生きているのかを理解するのは難しいと感じています。それで「衝動性が強い」お子さんでも、実際は時々刻々と変わる状況で「衝動性が強い」と見られるような行動が発現したりそうでなかったりしますし、その「衝動性が強い」といってもその行動の発現の仕方にはバリエーションや程度などがあり、そこにはその子どもの「調整」の仕方が反映されていると思います。このようにお子さん一人ひとりを、カテゴリー化した言葉で括らず、実際の状況のなかでどのように生きているのかを直視し、そのお子さんのことを本質的に少しでも理解するようにしています。そうすることで、そのお子さんのニーズが具体的に見えて、係わり（指導や支援など）も具体的に検討可能になります。これまで授業リフレクションで先生方とそのようにして取り組んできましたが、従来の指導法では見出せなかった、お子さんへの支援の内容や方法を具体的に見出せることが多く、先生方も重要なことだと実感しておられます。また、衝動性が強い、ワーキングメモリーが乏しい、手先が不器用等、発達の特性があるお子さんたちへの係わりもすでに実践しておりますので、それぞれの事例をじっくり説明する機会がいつかあればと思います。

６　重複障害児の手話が幼児期から学童期に進む段階で、曖昧になる原因は何でしょうか。どのような対策が考えられますか。

➡ろう重複だから一様に曖昧になるとは限らないのですが、これまでの 10 年以上にわたるろう重複教育の実践研究から考えられることは、幼児期から学童期へに限らず、手話を使うコミュニケーションを経験すれば、だんだん新しい手話表現を使うようになることがあります。そうなると、ろう重複のお子さん一人ひとりの「わかりかた」によって、なんか似ている手話表現が増えてきたな、これらはどのように区別したらいいんだろう、と手話表現の情報を処理することが難しくなり、その結果、そのお子さんの手話表現にも反映されていくということです。そう考えると、お子さん一人ひとりの「わかりかた」は何か、どのような困難が起こっているのかを捉えて必要な対応を考えることがポイントです。１つの事例を挙げます。ろうと ASD が重複している児童の手話表現で手指の動く軌跡が一見曖昧なように見えたため、授業リフレクションで微視的分析を行った結果、その児童の視線の動きが空いての手指の動きについていけていない、それならばついていけるように児童の視線の動きが細かくなる課題学習を設定したらどうかということになりました。その結果、児童の手話表現の軌跡が明確になり、他者との意思疎通もスムーズになりました。

７　分かり方を知る、という意味では、必ずしも手話辞典に載っているような手話でなくても、その子どもの生活経験からその言葉が示すものを想起させる身振りを手話として扱い、やりとりすれば良い、という考えでも良いでしょうか？

➡その通りです。手話辞典に載っているのはもともと成人が用いている手話表現であり、かつ文化的に共有されたものです。しかしろう重複のお子さんたちは、文化的共有の前に、まず自分自身のわかりかたに基づいてわかるものから取り込んでコミュニケーションしていくというニーズを持っていることが多いので、子どもの生活経験やコミュニケーションからこのようなわかりかたをしているんだな、それならその子どもの経験とつながる動きや形をもとに共通サインを作ったり、手話や身振りの中でわかりかたにマッチした表現を取り込んでアレンジしたりしていくということを実践しています。手話辞典に載っている手話でなければならないのかなとは考えずに、柔軟にお子さんとのコミュニケーションのなかで楽しく模索していただければと思います。

８　乳幼児相談を担当しています。発達障害を併せ持つお子さんを担当していますが、なかなか視線が合わず、いつも活発に動いています。2 歳児でデフファミリーのお子さんですが、手話での表出もなく、保護者も悩んでいます。

➡視線が合わなくても手話での表出がなくても大丈夫です。いつも活発に動いていること自体が、すでにそのお子さんのことばなのです。どういうことばなのかは、やはりそのお子さんの行動をその時々の状況との関係で見ていくと、ああお子さんはこんなふうに考えているんだ、こういうことをしているんだということが色々と見えてくることが多いですし、その中にはすごく感動させられることもあります。ですから視線や手話のようにこちらが観察する対象を限定してしまうのではなく、意図的に発信してはいない行動も含めて細やかに捉えてみると、お子さんから私はこういう人ですよと教えてくれます。先生がそのように教えてもらえたら、ぜひ親御さんにも、そのお子さんの通訳者のようになって伝えてあげてください。

９　重度身体障害の小学一年生の子にはどんな関りからはじめるといいですか？食べることも訓練が必要な子のお母さんにどんな事を伝えるといいですか？

➡食べることで訓練が必要と思われる重度身体障害のろう児童との係わりについてですね。そのお子さんの具体的な様子が見えないので、具体的なことは言えないです。すみません。一般論になりますが、講演で話したように授業も含めてあらゆる場面において「コミュニケーション」があり、私たちはその「コミュニケーション」をどのように作っていくかが問われています。食べる場面においても、一方的に食べさせるとか、自分で食べられるように指導するとか、そういうふうに一方向的なコミュニケーションだけを考えるのではなく、その時々に応じた「やりとり（双方向的なコミュニケーション）」を色々とはさんでみること、そのための状況作りを考えてみることを実践してはどうかと思います。例えば、お子さんが食べるものを選択しやすいように食べるものを配置しておき、「これ、ここに置く？」、「食べたいのはどれ？」などと確認・提案してお子さんとやりとりしながら、食べる活動をする、そうして一緒に食べることの楽しさや喜びをわかちあう関係を作るコミュニケーションができたらいいかなと思います。

１０　先生のお話を伺いながら、幼児と「気持ちを通じさせる」ということの難しさを感じました。子どもと楽しそうに遊んだり子どもが笑顔で寄ってくる先生と、私のように子どもとうまく遊べない教員と何が違うのでしょうか。

➡一概には言えないのですが、ろう重複のお子さんたちは、この先生ならわかってくれると人を選ぶ力があります。その先生が何か実践されているからそうなると思うので、その先生にどのような考えで実践しているのでしょうか？とその先生を巻き込んで自分なりにできることを探ってみる方法が考えられます。また、授業リフレクションで担任だけでなく他の

先生方にも参加していただいて、ビデオ分析の時に私から、この先生がこういうことを実践されたからろう重複のお子さんは安心して近づいたんだね、この先生はこういうことに気づいているからお子さんはもっと話そうとしてくれたんだね、というふうに実践を具体的にわかりやすく説明しておくことで、他の先生方も気づけるような経験を作っています。そのようにして先生同士で励まし合い、先生方がそれぞれ自分ができることを安心して積極的に伸ばしていけるような関係性（同僚性とも言います）を築けたらいいなと思っています。

＜松﨑先生がいくつか事例を紹介しているサイトを紹介します＞

自閉症スペクトラムの男児と先生が紡いだ小さな物語
https://note.com/matsuzakijo/n/nbc313d7944b3

響き合う対話の話
https://note.com/matsuzakijo/n/n0d180db259bb

相手の注意に自分の注意を重ねる
https://note.com/matsuzakijo/n/nac7f39649fd5

ある子どもの「自己調整」の物語
https://note.com/matsuzakijo/n/n948dedddf859

「ろう重複障害」における教育実践の探求
https://note.com/matsuzakijo/n/n2f103cbf611c

相手と共有できる言葉に出会う
https://note.com/matsuzakijo/n/nb1f9812b887d

「主体性」の幻想。
https://note.com/matsuzakijo/n/nb9bc243f6857

人の行動の機微に添うと新たな対話が開かれる。
https://note.com/matsuzakijo/n/nfc4eb39b0803